

包はシステムにより大石雄介が主宰します。

システム要領

1. 俳句、散文とも分量に制限なく、締切りも各人の自由とする。
2. 各人は、自稿を読ませたい相手に送稿する。その際、送稿がシステムによることを明記する。(注参照)
3. 編集・発行権は原稿受取人に属し、集まった原稿から随意に雑誌をつくることできる。その発行、公開等も随意とする。
4. 発行、公開された雑誌の一冊は、出稿者に送本することとする。
5. 発行経費は、発行者の個人負担とする。
6. システムの新しい仲間への趣旨徹底は、各人の責任とする。

(注) 送稿の際は下記に統一して下さい。

< 当送稿はシステムによります >

包9号目次

大石雄介句録(2) / 大石雄介

包・ぱお
9号
2001.11.1



大石雄介句録

2 (4/13 5/1 5/31)

サボテン一葉干^かひて厚し牙に当たる

いっも居る雉よお前か鏡になる

雨の雲雀かぐずぐずから旋^ま回^わってきた

白木蓮のあとほ蛇腹管白哲

春の日や泥まみれの石が来ている

春の川と山に溜めて日日見にゆく

山吹はよくのぼるまぐ見えなくなる

もう雨の青鷺^{あざな}がある目か見えな

春^{はる}烟^け春の空気は猧^{いぬ}を飛ばす

マイクロボスを野に捨て河原鴉^{からす}に託す

柳^{やなぎ}糸^{いと}あひて山鳩^{やまとび}いついゆいゆす

揚羽蝶^{やうよく}に似た踏切遮断器のバネかな

春の町に自転車^{じてんしゃ}が入る蘭のあと

霞^{かすみ}原^{はら}やい綾^{あや}鶏^{どり}に似た地雷もある

閑居^{かんこ}して今日は著^あ萩^{はぎ}の花に落ちた

ブレーキ板^{いた}かれ自転車^{じてんしゃ}地縛^{ぢばく}りの黄^きの花

生^{なま}ずまいる銀蠅^{ぎんりゅう}の青を板^{いた}けゆく

5/3

5/2

2

1

5/1

ちようげんぼうの林で白きもの騒ぐ
 青き枇杷に艶の加わる雲の日
 撫子の花粉を鼻につけて来たる
 水に没するうらと黄菖蒲もあり
 草の玉と言えり黄の花の路地かな
 地縛りの花は指折るより廻せよ
 われを冒す草の玉黄の虫とくら
 浮かんではいるもの一つの青梨
 極の芽や我もからだ垂れてゆくなり
 磨擦のゆくとともに乙女酸葉の穂は

5/6~7

5/5

4

起こしてみるおにのゲーの陰茎かな
 身を割いてからすのえんどうの莢に入れり
 つぎつぎべにしじみてふわか指たち
 目の高さに雲雀かいる不思議かな
 野苺子農具小屋の錠を磨く子
 木の葉はからすのえんどうより重いよ
 はないばら(金)和の君と雨に濡らすな
 梅の木に臂のかたちの巣がある
 柿の花がまだ来ていない空かな
 捨て甘藍の黄花とこんなにも数えた

5/4

3

額もて見ゆべし 銀河花菱は
 猛猛しいはこべもあやぬ春の暮
 畑打つ人と雉は頭と下やて跳ぬる
 ニセアカシヤを映す水路はそこの左
 青き枇杷すでに大明日は風吹く
 山吹咲きのほるキリスト兄弟団幼稚園
 漆の木と胡桃とちかえ鴉を追こり
 く明に下して水木の花と住むよ
 水道橋ゆく人燕に交いりゆくよ
 かまきりの卵囊と教之人は遊ばい

5/10

5/9

6

世界をニフに分けるとすれば芭蕉の花
 ギギギグジユグジユの蔭切や単純時間
 友の心とむとつふたつと過ぎるよ蘭
 ぼくに来て雉は声と打ちつづける
 雪加肺と使ひ尽くして落ちるなり
 話草は咲いて呆けて大きいは
 世界異きほどのぼうふうといるなり
 一夜育つギフギ妻を越えて来たる
 玉葱のうらに自転車と吊るかな
 蛇女と敵はばらまかれたるごとし

5/8

5/8

5

卯不は雷のあふれあふれてくる日日
 学校は嫌いで雄へいちごの花
 一夜茸の三日乾坤灰をかぶる
 毛糸かたまつて不自然なかたまりかな
 雀の子かほたほたする黄色いシミ
 野ぼらの香は聲の中まで差しこくる
 蟻牧の真赤なやつと直面せり
 数萱草を掘っていつたいのしし銀河
 夏鶏一ツ水くぐり水くぐり恋す
 羽化してくる小さい小さいき揚羽である

骨か頭かそこに桑の実が入る
 落ちてくる宙船の子攪わる宙船の子
 神社の幕と梨棚の幕だんだん似てくる
 げんげ田の二人足許の犬も頭
 たんぽほの紫の透明を行きけり
 虎杖や人はさまがまに折れるよ
 雉の巣で三ツ先のパン工場
 犬は梅雨の肢を病むか聲を病むか
 飛びながら癩癩を打つ椋鳥かな
 齧られて蛇母身の白きこと

夏の土手なる鶏卵大の個かな
 夏草は才遠い人や遠い飯
 日日青梨の日日水が来ている
 俺は鶴の家があるあとへかからぬ
 雉の卵と決めて振つてやるなり
 内側を刺され蛇と虫と虫とちかう
 げんげ田の袈は骸一かし扱くな
 べにかなめの路地なる養鶏は水のことし
 花茨シヤワ一なす日日が来たる
 鳩と刺すこどく田に水を差すよ

5/16

10

エロ本のうらぎんしいみの土手かな
 箱根山椒薔薇まが蟻が二つ来た
 箱根山椒薔薇は己か刺は知らぬ
 箱根山椒薔薇初咲きか二つた歳なり
 榛のあいは燕も見ているらし
 羽虫といはうよりいこれてく夏の日
 道にかくれたニセアカシヤの花の巢
 燕の腹の斑を数えて行くところなし
 羽根やいれた鳩は直飛すぼくを見ない
 ナンバ一ポレ一ト磨く人ら夏の路地は

5/15

9

5/4

死んだいりする尺蠖や空には雨
 寂なくてつやっやとして桜の実
 雉の卵よしもたまに夏の道
 殺意と性欲すこし混じって梨畑
 向こう岸の桑の実が日を揺ぬだす
 わか肺胸葎の河原となる日なり
 銀蠅青し君は飢えを好むなかれ
 翼片かわえかれた世界夏の鴉
 鼠轆かかれて夏空の鏡となれ
 竹根山椒薔薇一輪は皿にかな

5/19

雄へひいちごは花あととやもやとなれり
 五月風立てり銀蠅犬の糞
 むらさきかたにばみ開く君はたいじょう
 雨と空の明なるちようかんぼうかな
 草刈るは銀蠅もろともに刈るなり
 犬の糞踏んで五月の土手を離る
 白楊の頭危くなる雉は冴える
 我は布巻いた棒ならん蟻が寄りくる
 すでに夏畑バケツも臂も白まかな
 明神岳はばらばらの山五月曇き日

5/18

5/17

蓬につく丹の虫痛や天から来
 照る梨曇る梨子供の声が落ちる
 これはわか額指先これは野薔薇
 夏の道に標札捨ててありき白き
 自転車に君の白蝶があたるよ
 夏蜜柑ひとつかフリ合っているよ
 夏のはこべはすぐ花を持つ人の声
 漆喰如き木の葉あり夏ばてらし
 夏畑の宙に人あり棒持って
 梅雨の家を大き鳥越へ虚無の音

性欲あり甘鷲首締めて来たる
 甘鷲十葉書出すてい唯一大事
 甘鷲が直起きこれぬ君のそばに
 くわがたの屍と五月の頭に置く
 紅白の棒して戯れ五月の道
 自転車の錠なる亀虫の銀いり
 梨畑に除草剤打つほどの二人か
 夏河の日の溜にあり少女二人
 犬の毛が道のいとく林をゆく
 黄斑円孔とは夏草のことです

他人の息子の早真を壁に六月長夜
 カイテンとやらも鎖の格子縹半夏生
 焼酎や部室の角角が大切
 夏大根の種が歴史地図の上に
 低い音して電気治療器叩き
 椋鳥の子やわねに不完全な眼鏡三台
 床の蟻道はなんだん馬れるかい
 木の皮魚鐸のようハ置架道
 猫の仔や屋根かかくも重なりおる
 人は困り蟻よろこぶ道の高ナ

5/25

16

鶺鴒の子とほくか濡れぬがやでいるよ
 桑の実を食いちうかしたる犬たち
 梅雨入りの日大きな花火殻を得たり
 遠い田か甘鷺をよく翔ばす日
 椿の花は覆いそめてたる花なり
 鹿射香揚羽ごとく卒して河の人
 青き枇杷のここに自転車捨てるよ
 荒地羊蹄の穂をこぞりたるほ淋しい
 机の上ハッ橋ニ函か梅雨に入る
 帽子五枚たたくで置かれ雉のあと

5/24

5/23

15

段原をりか行くそろそろ復か
鳩の羽音に鴉かまいる夏の河原
甘鷲の一羽は好奇心の子なり
遠くから見ている猫の目の青き
紋白蝶の白を敷こては忘れる
夏かかんと流れ流れゆくかな
十字標識あまた踏んで行々子の地へ
青梨や雉はもう巣を解いたか
糸しいかの紫とわか家に打たん
柿の花はわつと飛んで来たらし

5/28

5/27

18

遠いあやは百日紅うし動いてゆく
眺めていて野蒜の花と突かぬ
犬抱く人に夏河の面は危機を兆す
あとかたもなき黄菖蒲の終ったあと
乙女をして犬の糞を土手に埋める
鏡を打つと燕もどきかいるなり
蓬踏むと真中あたり血かにいむ
気がかなかつた煙突に会う梅雨の道
刺しこくる中学生や梨さわかし
百日紅か大きな布で包まれたり

5/26

17

夏来たるホワイトボードの魚十字
 螢と^いう名の殺蚊具のやが点る
 人の空らぬ椅子が十五昼の雷
 花の咲かぬ芭蕉に日日霧吹く
 六月来る朝の歌に親しむ
 引くスイッチを押すスイッチ驟雨来し
 夜は蛾が来る朝は蜘蛛が来るそこぞ月
 星の打つ平家で青き枇杷が見える
 また蜘蛛が脱けたらうだい大きい
 夏来たる学習塾似なご拾いあるく

足高蜘蛛が死んだ自らは知らない
 ほくを盗んで足高蜘蛛が死んだ
 足高蜘蛛が死んだ雨と蟻が来た
 草刈りの蜘蛛の足は刈るなよ
 明神岳や燕は赤いと感いたあと
 川蟬が高くとびよ起きてこいよ
 朝ごぼんとえごの木の花を忘れた
 戯れ飛ぶの鳴とびつては居るなり
 泰山木の花一つ守る一日らし
 梅雨晴や猫の糞も散って青し

